

大阪大学図書館報

Vol.25 No.3 / 4 Mar.1992 (平成4年) 通巻105号

目次

- | | |
|-----------------------|------------------|
| ○ドイツ語と情報処理 | ○会議 |
| ○ILLモニター報告 | ○日誌 |
| ○平成3年度大学図書館職員講習会を受講して | ○人事 |
| ○教官著作寄贈図書 | ○統計 (図書館資料の増加状況) |

ドイツ語と情報処理

細谷行輝

些か旧聞に属するが、統一ドイツ誕生直前の1990年6月から、約3箇月、メルツェーデスベンツの本拠地としてつとに名高いシュツツガルトに滞在した。シュツツガルトは、ゲーテと共にドイツ文学の両翼を担う、フリードリ・フォン・シラーの生家が、その郊外の地、マールバッハに存在する事でも知られている。筆者は既に、1985年から2年間、ゲルマニスティク（ドイツ語学・意味理論）の研究のため、西ドイツはミュンスター市に滞在した経験を持つが、今回の渡独は、通常のゲルマニスト（ドイツ語学・文学研究者）とは縁の薄い（とは言え、独仏等特殊文字の高品位印字、ドイツ語自動分綴ソフト等には多くのゲルマニストが大いなる関心を抱いているようである）、情報処理研究、就中独和機械翻訳の研究を主たる目的とした。筆者の情報処理に関する止めどなき興味は、最初の滞独生活を終え帰国して間もない頃に生まれたものである。

帰国当時日本は、ワープロ流行の兆しが見え始めた頃であり、機械音痴の同僚までもが、単漢（既に死語？）ワープロを操っては筆者を驚かせた。筆者は、一種のカルチャーショックを感じたのである。この屈辱感（？）が、筆者をパソコンへと向かわしめた。そして本格的に作成した最初のプログラムが、Turbo Pascal 言語を使用した活用形対応例文検索プログラム「早苗」であった（その後C言語に移植）。これは、市販のデータ（例えば、ドイツ語のマンハイマーコーパス、英語のブラウンコーパス等）から、任意のキーワード（原形のみでの入力でも活用形にも対応）を含む例文を高速検索するものである（1メガのデータを数秒で走査する）。非常に多機能で、検索に伴うあらゆる問題を一応解決しているが、品詞判定、構文解析、意味処理などは行わず、あくまでも語形に依拠した例文検索を行う。

語形に依拠した例文検索から、筆者の興味は次第次第に意味処理の問題へと移って行くの

であるが、これは、「真の理論は実践を宗とする」という筆者の考え方からみて当然の帰結であった。つまり、実践を度外視した言葉の意味に関する理論は、荒っぽい言い方をすると、どうとでも言えるのである。真の理論は、実践の検証に堪えねばならない。筆者が長年研究してきた、また、自分なりに考えてきた言葉の意味に関する理論も、無論その実践的裏付けを必要とする。要するに筆者は、計算機を自らプログラミングすることにより、意味理論の客観的な証明の具として、計算機の使用の可能性を考えるに至ったのである。意味理論を検証するその一具体例が、筆者の場合、独和機械翻訳であった。

現在の機械翻訳のレベルは、多くの先人の尽力にも拘らず、観方にも依るが、利用者の意を満たしているとは到底言い難い。そこで、機械翻訳の方法論を根本的に再吟味する必要が生じているのでは、との認識から、筆者は特殊意味理論、「意味形態論」の機械翻訳への応用について考えるようになった。また、意味の専門家が、機械翻訳の構想を立て、自ら機械翻訳のプログラミングをする実験は、魅力的な企てであり、大いに実験に値するようにも思われた（勿論、実験結果を本当に云々するには長い年月を必要とする事、言うまでもない）。前置きが長くなったが、「意味形態論」の機械翻訳への応用の可能性を探る事、これが今回の渡独の主たる目的であった。

シュツツツガルト大学では、言語情報処理研究所と情報科学研究所とが不即不離の関係にあり、言語の専門家と情報の専門家による理想的な協力体制が出来上がっていた。筆者の滞独中の所属は、前者であったが、デスクは後者に用意され、机上にはワークステーションの端末としてコモドアが備えられたので、情報科学研究所に通う毎日が続いた。両研究所のこれまでの成果としては、日本語論文のタイトルのみドイツ語に機械翻訳するプロジェクトが内外に知られていた。タイトルのみ機械翻訳するのは簡単のように見えるが、文脈等の付加情報が決定的に不足するため、奇想天外の独訳を生み出す事も稀ではない。しかし、奇想天外の独訳が散見されるとは言え、日本の企業、日本の先端技術の動向を少しでも掴みたいとの切実な想いが込められているようで、笑うに笑えない一幕でもあった。

この両研究所とは現在疎遠となっているが、富士通が年間1億円程度出資しているソフトハウスARIS（アリス）では、数年来、羽中田博士が率いる形で、日独機械翻訳のプロジェクトを進めている。筆者が博士を訪れると、博士はARIS製日独機械翻訳システムに関するドイツの新聞記事等を見せて、システムの高い性能を筆者に訴えかけた。ちなみに日本の新聞（毎日新聞〔1989.08.15〕）でも、このシステムを以下のように取り上げている。

富士通は十四日、西独のソフトハウス「アリス・ソフトウェア開発」（本社・シュツツツガルト）と共同で世界初の日独機械翻訳システムを開発したと発表した。一時間に六千語を日本語から独語に翻訳可能で、商用文、技術書などの実用文を翻訳対象にしている。十六日から三日間、西独ミュンヘンで開かれる機械翻訳サミット〔2〕に展示、来年にも製品化する方針で、独に進出する日本企業に売りこみを図る。

しかしながら、筆者の実見によれば、無論このシステムの適用範囲にも依るが、まだまだ実用には耐え難い翻訳文であった。そこで、実際にこのシステムを開発している若き言語学者等と機械翻訳の方法論についてディスカッションをすることになった。この際筆者が持ちだした方法論が、「意味形態論」である。この理論は、ARISがシステム開発の基本に据えているヴァレンツ理論とも重なる点が多々あり、大いに興味を示してもらえた。それでは、「意味形態論」とは何なのか。ディスカッションでの筆者の発言の一部を以下に記して、その輪郭を紹介する。

日本人言語学者、関口存男せきぐちつぎおにより唱えられた意味理論、「意味形態論」は主として次の特徴を持つ。

- 1) 語感の分析に有効
- 2) 噛み砕いた翻訳を可能にする

機械翻訳の品質を飛躍的に高めるには、優れた翻訳者の語感を翻訳ソフトに移植することが不可欠である。関口存男は語学の天才であったが、翻訳に於いても余人の追隨を許さぬ達人であった。そして彼自ら、語感を分析するために公にしている方法論が、「意味形態論」である。

翻訳作業で苦慮する事柄の一つに、それ自身意味らしき意味を持たぬ単語の取扱いがある。前置詞、冠詞などである。名詞、形容詞、副詞、動詞といった概念語とは異なり、冠詞、前置詞などは、それ自身意味を有するのではなくて、意味用法、すなわち、「意味形態」のみが認められる品詞である。これをいかに翻訳するかにより、翻訳の質が問われることも稀ではない。例えば冠詞の意味形態は、日本語の格助詞（「は」、「が」）を用いた訳出の際にも微妙な語感を提供する（„Das ist ein Lastwagen.“〔あれはトラックだ〕 \Leftrightarrow „Das ist der Lastwagen.“〔あれが例のトラックだ〕）。

また、意味形態論では、従来ややもすれば混同しがちであった形式と内容、形態と意味を相対的に分離することにより、普遍的な意味形態と国語特有の意味形態を峻別する。これにより、多言語間の機械翻訳で真に有効な意味のパターンのみを抽出することが可能となる。例えば、冠詞の問題について言うならば、関口は、畢生の作『冠詞』（三巻本A 4版2301頁）において、定冠詞・不定冠詞・無冠詞の意味形態を詳述するが、定冠詞と不定冠詞を区別する根本原理（普遍的な意味形態）を「具体化規定」と「特殊化規定」に見いだしている。つまり、対象となる名詞の概念が、特殊化規定されているのか、あるいは具体化規定されているのかを判別できるような翻訳ソフトを組むことにより、定冠詞・不定冠詞の微妙な意味を十全に訳出することが可能となる。

また、例えば形容詞・副詞を訳出するに当たって、「見地」という特殊な意味形態の認識が不可欠であるが、これを云々した言語理論は筆者の知る限り皆無である。具体的には関口の次の言葉を引用しておく。

普通の „様相の副詞“ (Adverbien des Modus) と „見地の副詞“ (Adverbien der Hinsicht) とが全然別箇の意味形態であることは、たとえば只今例にあげた dramatisch gesehen „劇として見ると“、wirtschaftlich spüren „経済的に痛感する“、sexuell aufklären „性的に啓発する“等を、もし仮に様相の副詞という意味形態に解釈した場合には、如何なる奇怪千万な „意味“ が生ずるかを想って見るがよい。 „劇的な様相で見る“ (即ち見方そのものが芝居じみている) とか、 „性的に啓発する“ (即ち啓発の方法が大いに性的である!!) などということは、考えただけでも戦慄或いは憤飯に値しははしないであろうか? (冠詞第1巻: S. 957)

つまり、意味形態を把握せずして意味の訳出は不可能であり、機械翻訳に於いても、上質の訳出を意図するならば、意味形態（意味のパターン）の把握が不可欠となる。その他『冠詞』には、前置詞のありとあらゆる意味形態もきめ細かく解説されており、機械翻訳のみならず、人間の手になる翻訳にも計り知れない知識を提供してくれる。

たとえば、人間ならば、一読してそく、ein Vorwort zu dem Buch が一つの意味的まとまり、すなわち「本『の』序文」、であること、換言するならば、前置詞句 zu dem Buch が名詞 Vorwort を規定していることを認識できるが、計算機にこの種の判断能力を与えるには、さまざまな工夫が必要になって来る。判断能力と言うよりも、むしろここでは、前置詞 zu の訳語の選択が問題になって来る。すなわち、機械翻訳の辞書ファイルには、zu

に対する訳語『の』が選択される条件を属性情報として付記して置く必要がある。

つまり、前置詞 zu の直前に位置する名詞と、前置詞 zu に支配される名詞とが意味的に連関的所属関係を構成する場合に、訳語『の』を選択する必要が生じる。また、名詞 Vorwort の属性情報の中にも、この名詞がそもそも、前置詞 zu といわばコンビネーションで使用される可能性のあること、またその際、前置詞 zu に支配される側の名詞の属性に、本とか論文とか言ったたぐいの書物を包摂するメルクマールが、情報として記載されていること（一種の意味ネットワーク）などが、前置詞 zu の適切な訳語を選択する条件となって来る。ちなみに前置詞 zu のこの種の意味用法を、意味形態論の方では、「連関的所属の zu」、
「付属対立の zu」と呼んでいるが、要するに、二者でもって一つの連関的所属関係をなすものならば、この種の前置詞で結合することが可能になって来る。例えば、雑誌とさし絵、割れ鍋にとじぶた、日本人にカメラ、ビールにおつまみ、と言った組み合わせも、この種の意味形態と深く関係して来る。

また『冠詞』では、機械翻訳で必ず問題となる、語と語の規定関係（形式的並びに内容的規定関係）を根本的に解決する哲眼にも、間然する所が無い。あるいは代名詞の訳出にも、「換称代名詞」なる意味は範疇を設けることにより、より適切な訳出を可能ならしめている。要するに『冠詞』には、機械・人間を問わず、また言語の別を問わず、優れた翻訳を実現するためのノウハウが根本的な形で詰め込まれており、これを計算機に移植すれば、従来の品質とは比較にならない上質の機械翻訳が可能となるであろう。

現在、機械翻訳に携わっておられる方々、あるいは、意味の問題を根本的に哲学してみたい方々に、『冠詞』の一読をお薦めする。読者を裏切らない書である。

（ほそや ゆきてる 言語文化部ドイツ語教育講座助教授）

ILLモニター報告

松原 美重子

学術情報センターでは、図書館間で実施している文献複写や現物貸借業務において、所在調査や通信・連絡の部分を電子的に行うことにより文献の提供を迅速にし、業務の効率化を図る目的でILLシステムを開発した。

NCの総合目録データベースには、1991年7月現在で図書530万件（158機関参加）、雑誌230万件（725機関参加）の所蔵データが登録されている。ILLシステムはこのデータベースを生かして、文献の所在調査から依頼伝票作成・受付処理、業務に係わる料金計算・通知まで一連の業務を統合して処理しようとするシステムである。複写申込レコードは処理の進み具合によって、準備中・未処理・処理中・発送・確認などの処理状態に変化する。

システムの運用に先立ち、モニターとして66機関83図書館室が参加して実際にILLシステムを稼働してみた。モニターが終って間もなくその結果を話し合う機会があり、現在は各地で説明会や講習会が行われているところである。平成4年4月からはNACSIS-CAT接続館を対象に正式運用を開始し、いずれNACSIS-ILLのみの接続館に対してもサービスを行う予定である。

ILLシステムのモニターは1991年11月11日から2週間にわたって行われた。モニターとして全国の66大学83図書館室（国立68館室、公立1館室、私立14館室）が参加し、実際に料金の支払いを含めたデータのやり取りを経験した。この2週間のうち前半の1週間のみ複写を依頼することができ、後半の1週間はモニター期間中に作業を完結させるための予備期間である。今回のモニターでは文献複写業務のみ実施し、現物貸借業務は行われなかった。モニ

ター終了後11月25日、26日に西日本の大学図書館が集まり、国立大学図書館協議会シンポジウム（西会場）が開催され、システムの説明、モニター館の報告やILLシステムを運用するに当たっての問題点が話し合われたので、シンポジウムでの話題などを紹介する。

生命科学図書館では、モニター期間中に依頼11件（全件到着）、受付204件（うち発送167件、謝絶37件）あった。ただし、1991年11月現在の学術情報センター側の発表では生命科学図書館の受付件数は199件（うち発送167件、謝絶32件）となっている。この差5件は当館で謝絶したものうち、他館へ自動転送されたものを含めなかったり、当館が受付ける以前に依頼館がキャンセルしたものをカウントしているためではないかと思われる。統計を出す場合はこの様な事態も考慮する必要がある。

複写を依頼する場合は、最大5館まで順位をつけて依頼先を指定することができ、謝絶された場合でも次の依頼先へ自動的に転送される。謝絶で転送される場合、文献入手までの日数が非常に短くなり、何回も同じ申込書を書いて発送する手数がなくなり、このシステムの最大のメリットではないかと思う。所蔵館が多い場合、依頼する地域を指定したり、最新号の文献が必要な場合には継続購入している館を指定するなどして、適切な依頼先に限定することができる。また依頼したものが受付館でどのような処理状態なのかを確認することができる。

生命科学図書館には大量の複写依頼があるため、学術情報センターの機能だけでは業務に支障をきたすと思われるので、ローカルシステムを開発し一括して複写受付を行う予定であるが、まだ稼働していない。今回のモニター期間では2枚複写のプリンター用紙を受付用紙として使用し、1枚を作業用、1枚を当館の控とした。なお、複写物の発送に際しては作業用の受付用紙に複写枚数と送料のみ記入し、複写物に同封して通知書とした。

受付の手順として画面よりプリンター用紙に1件ずつ出力し、ナンバリングで受付番号を付け、作業し易い様に誌名等にマーカーで印を付け、受付番号を入力し、受付用紙を受付順（当館控）と誌名順（作業用）に整理した。この手順で24件受け付けるのに60分要した。発送に関して、従来の方法と異なる点は、複写物に通知書を同封すると共に、複写枚数・送料などを入力して依頼館に通知することである。これは、受付館にとっては新たな負担であるが、料金を入力することにより国立大学間の文献複写料金については学術情報センターに入力されたデータを活用できるため、受付館からは様式B票を送付しなくてもよいことになる。料金入力の際に要する時間であるが複写のデータを一括入力する機能があり、入力する件数など状況によってだいぶ異なることが予想される。モニター期間中64件中35件入力するために37分、63件中50件入力するために36分要した。このシステムでは1度に大量のデータを入力した方が効率が良いことが分かる。学術情報センターではこの料金入力の部分を4月の正式運用からはもっと使い易いものにする予定である。謝絶については断る理由を書き込むことができ、「セイホンチュウ。12ガツチュウジュン マデ」などの短いコメント付きで7件処理するために9分要した。

実際に業務してみて、各館の業務体制も考慮する必要はあるが、この結果からは受付件数があまり多くなければ、ローカルシステムを用意しなくても学術情報センターの機能だけで十分業務が可能であるように思われる。受付側の利点として、複写依頼の際に書誌データベースからデータを取り込んでレコードを作成するので、雑誌名が完全な形で表示され、ISSNも表示されることである。このため書架から取り出す作業が楽になり、自館の目録での調査も楽になった。また、項目ごとに入力されているので、記述されているデータが雑誌名なのか論文名なのかなどを判別し易いこともあげられる。

シンポジウムでは、このシステムに対し意見や要望も出されたので少し紹介すると、

- レコードの状態を調べ易くするため、業務選択画面にメニューを追加する。検索のメニューを選んだ場合、直接検索可能な項目を増やす。
- レスポンスの改善
- 送付用帳票の様式を統一する。
- ORDERコマンドの後は書誌検索画面に戻す。
- 全般的に画面が見づらく情報が読み取りにくい。

などである。

システムの細かい部分には様々な意見があるものの、システム全体に対しては高く評価されており、4月からの正式運用に当たっては、多くの大学図書館が参加するよう期待される。

〈参考資料〉

1. 学術情報センターニュース No.15 (1991) P. 10
2. オンライン・システムニュースレター No.29 (1991) P. 7～9
3. ILLシステム操作マニュアルモニター用 (1991) P. 1～5

(医学情報課 資料運用掛)

平成3年度大学図書館職員講習会を受講して

11月18日から21日までの4日間、平成3年度の大学図書館職員講習会が、吹田分館で開催されました。この講習会は、『大学図書館活動を促進するため、大学図書館の中堅職員に図書館業務の最新の知識及び専門的技術を修得させ、その資質の向上を図る』ことが目的とされ、『大学等の図書館(室)において、2年以上の勤務経験を有する35歳以下の中堅職員』を対象として、毎年全国二つの会場で行われているものです。今回は吹田分館が大阪会場ということで、西日本を中心とした国、公、私立大学図書館から、93名の参加がありました。

講習会の内容は、大きく講義、見学、共同討議に分かれます。講義は、学術情報システムに関する内容が中心でしたが、酸性紙の劣化問題や著作権問題にも及びました。見学は、国立民族学博物館と生命科学図書館でした。国立民族学博物館では、移動作業が一段落ついたところの円形新書庫やビデオテークの様子などを中心に、また生命科学図書館では、開館してまもない全館の様子やちょうどモニター期間中であつたILLシステムの画面展開などを中心に見学しました。共同討議は、『図書館における情報提供サービスについて』がテーマでした。十数名ずつのグループに分かれ、それぞれのグループで討議をした後、その結果を発表するという形がとられました。又、初日の講義終了後に開かれた懇親会(希望者のみ)にも多数の参加があり、お国自慢や図書館員になった経緯などさまざまな情報の交換が、楽しい雰囲気の中で盛んに行われていました。

越田館長の、資料の分類から生物学の分類へとつながる広汎な視野に立った講義で始まった4日間は、修了証授与で無事幕を閉じました。盛り沢山の内容でしたが、図書館業務の経験やおかれている環境が様々である受講者は、それぞれの観点でこの4日間をうけとめていました。はたして最初に掲げた目的の方はどうなったのでしょうか。ここに、本学図書館から参加した3名の感想が寄せられているので紹介します。

今枝 文子

私にとって今回の講習会の成果は、大学図書館界において自分の職場の占める位置がおぼろげながらも見えてきたこと、とまとめることができます。

まず講義。それぞれの講義は、そのテーマが自分の図書館にどう関わるのかを考える契機となりました。例えば「紙の劣化とその対策」。全書架が閲覧室とひとつづきのスペースにあって書庫として独立していない生命科学図書館の場合、人間にとっての快適さと紙にとっての快適さ（低温、低湿）とを調和させていかなければいけないのだなあ、など。

そういう意味で特に私が恵まれていたのは、講師全体の3分の1にもあたる数の阪大からの講師陣。当然、その講義では大阪大学の話が事例として登場してくることが圧倒的に多いわけですから、自分の職場や日常業務がそれぞれの講義テーマ（外国雑誌センター、CD-ROM導入、参考業務）のコンテキストの中で直に語られるのを聞くことができたのです。今までは自分の職場として内からしか見えていなかった阪大図書館を、外から見る視点を持つことができたということだと思います。

そして共同討議。「図書館における情報提供について」と、テーマが大きすぎ、なかなか論点がかめれないまま時間ぎれ。しかし、他の大学図書館の人を相手に自分の図書館の現状を説明しようと試みる機会が持てたことは貴重な体験でした。みんな図書館の職員ですから、「機械化」、「ネットワーク」など、同じような言葉を使うのだけれど、それぞれが所属する図書館の規模や発展段階が全く異なるため、言葉からイメージするものは案外ちがうのだ、という認識を持つことは大切だと思いました。

（いまえだ ふみこ 医学情報課 参考調査掛）

高野 恵子

この講習会の共同討議のテーマが、「図書館における情報提供サービス」であることにも表れていると思うが、講習の内容は、情報のサービス、資料の提供という点に中心がおかれていた。しかも、「最新の知識」ということで、かなり先端の内容も多かった様に思う。しかし、話は、基本的な所から始められ、段階を踏んで進められていくので、日常業務でこのようなことに縁のない私にとっては、大変有難く頭の内では少しは整理がついた気分になったのであった。それにしても、会場になっていることもあってか、本学の図書館の事例もこの様な内容でよく引き合いに出され、「そうだったのか、そんなに進んでいたのか」と、自分の無知を恥じながらも、学外の人間が初めて阪大図書館を見学するときのように私は聴いていた。ただ、やはり、自分の業務に関係する様な資料の収集方面の講義もあれば、違う意味で興味深く聴けたであろうと思うと、残念であった。

この様な講義を受けていると、未来の、それもかなり近い将来であろう「夢の電子図書館」が頭に広がるのであるが、共同討議でのテーマに対する参加者の発言は、これとは全く対照的なものであった。日常業務における非常に現実的な問題がほとんどであり、双方のギャップの大きさというものは大変おもしろいと思った。

尚、共同討議という場合は、色々な図書館の現状の生の声がきけるので貴重な場所だと思うが、今回私の参加したグループでは、テーマに対するまとまりがつかず、結局各々が“身上話”をする段階で終わってしまった。他のグループでも、多少なりともこの状況はあった様なので、制限された短い時間の内とはいえ、個人的環境や経験を超える共通の論点を持てる討議のやり方を考えるべきであったと思っている。

（たかの けいこ 情報管理課 図書受入掛）

岸本 まどか

今回の講習会では様々な講義を聴くことが出来ました。自分が関わったことのない分野の講義、例えば漢字コードの作成についてなど、今まで全く知らなかった話もあって、新鮮で

興味を持って聴けました。同時に図書館に携わる仕事にもいろいろな仕事があるものだという驚きもありました。多くの人々のたゆまない努力によって図書館が発展してきたこと、そして、図書館がこれからも大きく変わっていくとする中で、困難な問題が数多くあることを痛感しました。電子図書館のことなどを聴くと、図書館の未来はどう変わっていくのだろうか、どう変わっていくべきなのだろうかと考えさせられました。

また、この講習会には国公・私立大学に勤める人が参加していましたが、規模も異っており、討議の際も意見をまとめるというところまではなかなかいきませんでした。しかし、いろいろな図書館の状況を知り、またそれぞれの条件のもとで頑張っている人と触れ合う機会がもてたことは貴重だったと思います。

講習会を通して、いつもより広い眼で図書館というものを捉えられたように思います。そしてそこで働く者として、司書の仕事、役割について改めて振り返ることも出きました。客観的に自分の置かれている環境や立場を見つめ直せたということがとても勉強になり良かったと思います。

(きしもと まどか 情報サービス課 基礎工学情報掛)

教官著作寄贈図書

- | | |
|--|--|
| 一本 館一 | 岡野 錦彌 (医・名誉教授) |
| 井畑 敏一 (教・教授) | 南朝秘史 定助一族と大塚掃部助 上・下
岡野 錦彌他著 |
| Organic synthesis at high pressures
Kiyoshi Matsumoto and R. Morrin
Acheson (ed.) Contributors, Toshikazu Ibata, et al.
(Wiley-Interscience 1990) | (岡野 錦彌 1991) |
| 井畑 敏一 (教・教授) | 沖田 知子 (医短・助教授) |
| 化学
井畑 敏一他著
(三共出版 1990) | アリスの英語
稲木 昭子、沖田知子共著
(研究社出版 1991) |
| 大高 順雄 (言文・教授) | 波田 節夫 (言文・教授) |
| 世界のことば
大高 順雄他著
(朝日新聞社 1991) | 参加と距離化 (叢書ユニベルシタス354)
N. エリアス著 波田 節夫共訳
(法政大学出版局 1991) |
| 岡田 章子 (言文・客員教授) | 久貴 忠彦 (法・教授) |
| 魔法と妖精
岡田 章子著
(あぼろん社 1991) | 講座現代家族法
久貴 忠彦他編
(日本評論社 1991) |
| | 櫛田 孝司 (理・教授) |
| | Optical properties of solids
Takashi Kushida
(World Scientific 1991) |

- 松井 茂記 (法・助教授)
 司法審査と民主主義
 松井 茂記著
 (有斐閣 1991)
- 齊藤 慎 (教・教授)
 地方財政論 (新経済ライブラリー 18)
 齊藤 慎他著
 (サイエンス社 1991)
- 都出比呂志 (文・教授)
 謎の鏡
 都出比呂志他著
 (同朋舎出版 1989)
- 都出比呂志 (文・教授)
 邪馬台国の時代
 都出比呂志他編著
 (木耳社 1990)
- 都出比呂志 (文・教授)
 大和政権への道 古代史シンポジウム
 都出比呂志他著
 (日本放送協会 1991)
- 生命科学図書館—
- 杉本 侃 (医・教授)
 救急医学
 杉本 侃編著
 (朝倉書店 1991)
- 和田 博 (医・教授)
 Enzymes dependent on pyridoxal phosphate and other carbonyl compounds as cofactors (International Union of Biochemistry Symposium 199)
 T. Fukui, H. Kagamiyama, K. Soda, and H. Wada (ed.)
 (Pergamon 1991)
- 和田 博 (医・教授)
 Histaminergic Neurons : morphology and function
 Takehiko Watanabe and Hiroshi Wada (ed.)
 (CRC Press 1991)
- 豊島久真男 (微研・教授)
 がんのバイオサイエンス 1~5(全5巻)
 豊島久真男・黒木登志夫編集代表
 (東京大学出版会 1991)
- 鈴木不二男 (歯・教授)
 骨代謝調節因子—最近の進歩—(Recent progress in factors controlling bone metabolism)
 藤田 拓男・鈴木不二男・尾形 悦郎・須田 立雄監修
 (羊土社 1991)
- 吹田分館—
- 横山 昌弘 (レーザー・教授)
 プラズマ理工学—大電流プラズマ現象とその応用—
 横山 昌弘編著
 (日刊工業新聞社 1991)
- 柏原 士郎 (工・助教授)
 地域施設計画論—立地モデルの手法と応用—
 柏原 士郎著
 (鹿島出版会 1991)
- 足立 吟也 (工・教授)
 21世紀への化学—バイオテクノロジーとマテリアルサイエンス—
 M. L. Good編、足立 吟也他訳
 (化学同人 1991)

- 古城 紀雄 (工・助教授)
Superplasticity in advanced materials
Norio Furushiro et al (ed.)
(The Japan Society for Research on
Superplasticity 1991)
- 増原 宏 (工・教授)
有機超薄膜入門
増原 宏他著
(培風館 1989)
- 増原 宏 (工・教授)
Photochemical processes in organized molecular systems, (Proceedings of the Memorial Conference for the late Professor Shegeo Tazuke Yokohama, Japan, Sep. 22-24, 1990)
Hiroschi Masuhara et al (ed.)
(Elsevier 1991)
- 池田 和義 (工・教授)
基礎熱力学-エントロピーから浸透圧まで-
池田 和義著
(朝倉書店 1991)
- 麻生 誠 (人科・教授)
日本の学歴エリート
麻生 誠著
(玉川大学出版部 1991)
- 白井 良明 (工・教授)
人工知能の理論 (コンピュータ数学シリーズ 16)
白井 良明著
(コロナ社 1992)
- 基礎工学部図書室-
- 又賀 昇 (基礎工・名誉教授)
Electron transfer inorganic, and biological systems (Advances in Chemistry Series, CRC Symposium Series 2)
James R. Bolton, Noboru Mataga, and George McLendon (ed.)
(American Chemical Society 1991)
- 千原 国宏 (基礎工・助教授)
パソコン世代の電子回路入門
千原 国宏著
(コロナ社 1991)
- 千原 国宏 (基礎工・助教授)
センサー変換原理からコンピュータ応用計測まで-
千原 国宏著
(コロナ社 1991)

■■■■ 会 議 ■■■■

豊中地区運営委員会

3.10.30 (水) 14:00~16:00 (本館会議室)

協議事項: 1. 本館利用内規の改正案を審議した。2. 完全週休2日制への対応について協議した。3. 豊中地区運営委員会規程第6条の「代理人規定」の運用方針について申し合わせた。

豊中地区運営委員会

3.12.17 (水) 15:00~17:00 (本館会議室)

協議事項: 1. 平成4年度の基本図書購入計画を審議・決定した。2. 本館利用内規の改正案を審議・決定した。3. 完全週休2日制への対応について協議した。

分館長会議

3.10.1 (火) 14:00~16:20 (本館会議室)

協議事項：1. 附属図書館規程、事務部分課規程、事務部事務文掌規程の一部改正案及び附属図書館閲覧規程の全部改正案について協議した。2. 完全週休2日制への対応について協議した。

分館長会議

3.12.6 (金) 15:00~16:40 (本館会議室)

協議事項：1. 吹田地区運営委員会規程、本館利用内規、吹田分館利用内規一部改正案および生命科学分館利用内規の制定案について協議した。2. 平成4年度事業費予算要求案について協議した。3. 平成5年度新規概要要求事項(案)について協議した。4. 完全週休2日制への対応について協議した。

図書館委員

3.10.23 (水) 15:00~16:45 (本館会議室)

協議事項：1. 附属図書館規程、事務部分課規程、事務部事務分掌規程の一部改正案を審議・決定した。また、附属図書館閲覧規程の全部改正案について審議し大筋を決定した。2. 生命科学分館長の事前選考の方法及びその暫定任期について審議・決定した。3. 完全週休2日制への対応について協議した。4. 図書館委員会規程第8条の「代理人規定」の運用方針について申し合わせた。

図書館委員会

3.12.26 (木) 15:00~16:25 (本館会議室)

協議事項：1. 附属図書館閲覧規程の全部改正案(最終案)及び吹田地区運営委員会規程の一部改正案を審議・決定した。また、本館利用内規、吹田分館利用内規の一部改正案及び生命科学分館利用内規の制定案を承認した。2. 平成4年度事業費予算要求案を審議・承認した。3. 平成5年度新規概算要求事項(案)を審議・承認した。4. 完全週休2日制への対応について協議した。

中之島分館運営委員会

生命科学図書館ワーキンググループ会合〔合同会議〕

3.10.22 (火) 14:00~16:00 (生命科学図書館 会議室)

協議事項：1. 附属図書館閲覧規程の改正について。各分館運営委員会、図書館委員会での協議を経た修正案を審議、原案どおり了承された。2. 生命科学分館利用内規について。附属図書館閲覧規程の修正案をふまえた内規修正案を審議、原案どおり了承された。3. 週休2日制への対応について。現在の情勢の説明ののち、意見交換がなされ、継続して検討することとした。

中之島分館委員会

生命科学図書館ワーキンググループ会合〔合同会議〕

3.12.16 (月) 13:00~14:00 (生命科学図書館会議室)

協議事項：1. 生命科学分館長候補者の選考方法について。図書館委員会から一任された標記の件について協議の結果、次回運営委員会において「生命科学分館長選考規程(案)」

にもとづいた選考を行うこととした。

中之島分館運営委員会

4. 1. 28 (火) 13:00~14:00 (生命科学図書館会議室)

協議事項：1. 生命科学分館長候補者の選考について。「生命科学分館長選考規程(案)」にもとづく選考の結果、鈴木不二男歯学部教授が選出され、図書館委員会に報告することとなった。

吹田地区運営委員会

3. 11. 5 (火) 15:30~16:45 (吹田分館会議室)

報告事項：1. 前回の吹田地区運営委員会で承認された外国雑誌選定小委員会内規、及び図書選定小委員会内規(改正)について。2. 平成4年度外国雑誌(吹田分館備付)の購入中止タイトル。

協議事項：1. 附属図書館吹田地区運営委員会規程改正(案)について。種々検討の結果、原案どおり承認された。2. 吹田分館利用内規(案)及び、利用内規(案)に関連して。大阪大学附属図書館吹田分館オンライン情報検索(外部システム用)サービス実施要項(案)について審議の結果、承認された。3. その他、委員より意見が出された新館1階のグループ閲覧室の利用について。今後改善を計ることになった。

吹田地区運営委員会

4. 2. 24 (月) 16:00~16:40 (吹田分館会議室)

報告事項：1. 附属図書館吹田地区運営委員会規定改正(案)について。2. 吹田分館利用内規(案)について。3. 閲覧室カーペットの敷設工事について。4. 閲覧室の照明器具取り替え工事について。5. 入退館システムの設置について。

協議事項：1. 次期分館長の選任について。次期分館長の選考が行われ、田中一朗工学部教授が次期分館長候補として選出された。2. その他、附属図書館体系検討小委員会の前委員であった井上勝敬教授(溶研)の後任として、堀川浩甫教授が選出された。

■■■■ 日 誌 ■■■■

- | | | |
|--------------|--------------------------|-----------|
| 3. 9. 17 | 日本医学図書館協会理事会 | (東京) |
| 3. 9. 24 | 生命科学図書館暫定開館 | |
| 3. 9. 30 | 近畿地区国公立大学図書館協議会主題別研究集会 | (京都大学) |
| 3. 10. 1 | 分館長会議 | (本館会議室) |
| 3. 10. 4 | 近畿地区医学図書館協議会例会 | (近畿大学) |
| 3. 10. 17~18 | 国立大学図書館協議会常務理事会 | (名古屋大学) |
| 3. 10. 17 | 国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会 | (名古屋大学) |
| 3. 10. 22 | 中之島分館運営委員会・生命科学図書館WG合同会議 | (生命科学図書館) |
| 3. 10. 23 | 図書館委員会 | (本館会議室) |
| 3. 10. 30 | 豊中地区運営委員会 | (本館会議室) |
| 3. 10. 31 | 国公私立大学図書館協力委員会 | (東京都立大学) |
| 3. 11. 1 | 生命科学図書館正式開館 | |
| 3. 11. 5 | 吹田地区運営委員会 | (吹田分館) |

3. 11. 6 日本医学図書館協会理事会 (東京)
3. 11. 6 学術情報センターNACSIS-IR利用者懇談会 (生命科学図書館)
3. 11. 8 日米ワンデイセミナー実行委員会 (京都大学)
3. 11. 11~21 ILLシステムモニター館テスト
3. 11. 14 国立七大学附属図書館部課長会議 (京都大学)
3. 11. 15 国立七大学附属図書館協議会 (京都大学)
3. 11. 18~21 文部省主催図書館職員講習会 (吹田分館)
3. 11. 19 近畿地区国公立大学附属図書館協議会主題別研究集会 (神戸大学)
3. 11. 25~26 国立大学図書館協議会シンポジウム (関西セミナーハウス)
3. 11. 27 国立大学図書館協議会著作権問題特別委員会 (東京大学)
3. 11. 28~29 国立大学附属図書館事務部長会議 (筑波大学)
3. 12. 6 分館長会議 (本館会議室)
3. 12. 11 生命科学図書館竣工披露記念式典 (生命科学図書館)
3. 12. 16 中之島分館運営委員会・生命科学図書館WG合同会議 (生命科学図書館)
3. 12. 17 豊中地区運営委員会 (本館会議室)
3. 12. 26 図書館委員会 (本館会議室)
4. 1. 27 近畿地区医学図書館協議会例会 (生命科学図書館)
4. 1. 28 中之島分館運営委員会 (生命科学図書館)
4. 1. 30 学術情報センター主催ILLシステム全国説明会 (理学部)
4. 1. 31 近畿地区国公立大学図書館協議会主題別研究集会 (京都大学)
4. 2. 3 日本医学図書館協会理事会 (東京)
4. 2. 7 近畿地区国公立大学図書館協議会図書館施設に関する研究集会
(生命科学図書館)
4. 2. 24 吹田地区運営委員会 (吹田分館)

■■■■ 人 事 ■■■■

異動前の所属・職名	氏 名	異 動 内 容	発令年月日
		(採 用)	
	山本 隆嗣	事務補佐員 吹田分館 資料運用掛	3. 9. 11
	杉山 祐子	〃 情報サービス課 資料運用掛	3. 10. 1
	中嶋 都	〃 医学情報課 資料運用掛	3. 10. 16
	笠井美奈子	〃 〃 雑誌情報掛	3. 11. 1
		(辞 職)	
事務補佐員 情報サービス課 資料運用掛	沼田世志子		3. 9. 30
〃 医学情報課 資料運用掛	深本 悦子		〃
〃 〃 雑誌情報掛	田中 伸栄		3. 10. 31
〃 情報管理課 庶務掛	川本あや子		4. 1. 31
		(退 職)	
事務補佐員 情報サービス課 参考調査掛	大橋 寿香		4. 2. 29
〃 〃 資料運用掛	清川 栄一		〃
〃 吹田分館 資料運用掛	松田 洋一		〃
〃 〃 〃	鴨川 郷		〃

1990年度 図書館資料の増加状況

区 分	項 目	蔵書数(和・洋書別)		計 A + B (C+D)	蔵書数(備付別)		年 間 図 書 受 入 数			雑 誌 受 入 種 類 数					
		(A) 和	(B) 洋		C 図書(室) (室)に備付	D 郵局(資料 室・雑誌) に備付	購 入	寄 贈	製本受入	その他 (1)	計	購 入	寄 贈	計	
本 館	図書館(本館)	206,820	54,584	261,404	231,512	29,892	6,557	431	590	- 1,779	5,799	318	164	482	
	文学部	158,842	144,581	303,424	99,095	204,328	6,290	2,163	779	0	9,232	522	1,183	1,705	
	法学部	77,893	96,329	174,222	34,952	139,270	5,104	328	478	0	5,910	523	457	990	
	経済学部	89,792	79,507	169,299	110,923	58,376	1,949	99	1,519	0	3,567	668	523	1,191	
	教養部	127,984	89,165	217,149	75,849	141,300	3,352	185	1,229	0	4,766	449	0	449	
	言語文化部	16,384	43,352	59,736	2,027	57,709	5,323	113	95	0	5,531	290	0	290	
	健康体育部	6,112	973	7,085	0	7,085	325	0	50	0	375	62	64	126	
	社会経済研究所	16,703	15,474	32,177	0	32,177	487	18	162	0	667	246	205	451	
	小計	700,530	523,965	1,224,495	554,358	670,137	29,387	3,337	4,902	- 1,779	35,847	3,088	2,596	5,684	
	人間科学部	47,824	92,997	140,821	51,290	89,531	4,876	267	847	+ 390	6,380	865	601	1,466	
理学部	22,459	122,295	144,754	41,769	102,985	1,646	53	1,783	+19	3,460	540	328	868		
基礎工学部	35,171	84,569	119,740	45,057	74,683	1,985	84	2,131	-58	4,120	987	230	1,217		
小計	105,454	299,861	405,315	138,116	267,249	8,507	404	4,761	+ 288	13,960	2,392	1,159	3,551		
合計	805,984	823,826	1,629,810	692,474	937,386	37,894	3,741	9,663	- 1,491	49,807	5,480	3,755	9,235		
中之島分館	図書館(分館)	97,295	207,479	304,774			2,486	283	9,198	0	11,967	6,632	1,224	7,856	
	遊学分室	*	*	*			*	*	*	*	*	*	*	*	
	微生物系研究所図書室	5,753	26,639	32,392			160	4	834	0	998	214	136	350	
	蛋白質研究所図書室	1,503	14,384	15,887			90	41	563	0	694	84	179	263	
	合計	104,551	248,502	353,053			2,736	328	10,595	0	13,659	6,930	1,539	8,469	
	吹 田	図書館(分館)	65,005	41,905	106,910			974	356	582	0	1,912	320	745	1,065
		工学部	85,934	148,606	234,540			2,143	147	2,590	0	4,880	1,611	59	1,670
		海接工学研究所	1,001	2,507	3,508			87	31	138	0	256	69	2	71
		レーザ核融合研究センター	1,100	2,521	3,621			54	9	144	0	207	39	2	41
		核物理学研究センター	2,759	6,915	9,674			232	0	0	0	232	57	2	59
大型計算機センター		1,734	3,418	5,152			109	0	186	0	295	81	1	82	
産業科学研究所図書室		11,050	35,170	46,220			341	2	763	-21	1,085	328	86	414	
合計		168,583	241,042	409,625			3,940	545	4,403	-21	8,867	2,505	897	3,402	
養 学 部 分 館		合計	13,683	21,395	35,083	32,767	2,316	164	34	608	+ 6	812	142	157	289
		合計	1,092,806	1,334,765	2,427,571			44,734	4,643	25,269	- 1,506	73,145	15,057	6,348	21,405

*中之島分館に含む (1) 管理換・共用換等